

奨励賞

被災地に向き合う

横浜市立丸山台中学校 3年

おざわ さくらこ
小澤 桜子

2011年3月11日に起きた、東日本大震災と福島第1原子力発電所事故。世界中を震え上がらせた大災害から、かれこれ7年以上の時間が過ぎようとしている。

被災地・福島では、いまだ4万人以上が避難生活を送っている。被害を受けられた人々に支払うお金として「損害賠償」がある。東京電力によると、現在、要賠償額は10兆円を超えると計算されているという。しかし、被災者への賠償は進んでいるのに、復興はなかなか進んでいない。だから、私は、今の日本の復興支援に疑問を持った。

ある日、私と母が話していた時、母はこう言った。「たとえ、ライフラインが整って、昔住んでいた人が戻ってきて、新しく家が建って、新しく生活を始められるようになったとしても、津波で流された家とか思い出とか時間は戻ってこない。復興なんて、そんな綺麗事じゃないのよね。」

確かに、「復興」という言葉は難しい。なぜなら、「被災地は復興した」と断定することができるかは、個人の判断に委ねられるからだ。だが、少しでも被災地をきれいにして、ライフラインを元に戻し、新しい暮らしを始めることができるようにすること、それは、とても大きな意味があると思う。なぜなら、そうやって、元あった街を少しずつ取り戻していくことが、被災して心が傷ついた方々を癒すことにつながるのではないかと思うからだ。そうすれば、きっと、被災者の方々も街も、復興に向けて歩み出すことができる。

そんな被災地のために、私達ができること、それは、被災地に関心を持ち続けることだ。地震や大雨等の自然災害が起きた時に、新聞やテレビといったメディアは、一斉に被災地を報道する。しかし、彼らの報道は、1ヶ月も経つとなくなってしまう。あとは、1ヶ月、半年、1年といった節目の時しか報

道されない。そして人々の記憶から薄れ、忘れられていくのだ。

私の父は、福島にいる。福島で働いている人達は、毎日毎日一生懸命仕事をして、ふくしまを作っている。だから、私は知ることができた事がある。潰れたままの家や、津波に流されて無残な姿となった家が、手つかずのままに残されていること、荒れ放題になったお墓があること、あまりにも人が立ち入らないから、イノシシやシカが堂々と生活していて、生態系が崩れてしまっていること。あの大地震と原発事故から、7年も経過しているのに、だ。もし、私が被災地の情報に対して受け身の姿勢であったら、知らなかったと思う。こうした情報は、自分から調べないと見えてこないのだ。

だから、私達は、「被災地に関心を持ち続ける」という姿勢を、忘れてはならないと思う。私達若い世代が被災地に関心を持てば、メディアはもっと被災地に目を向けるようになる。支援の輪も広がっていくだろう。風評被害が薄まっていけば、経済も活性化する。私達の社会は私達のニーズによって動いているから、私達が求め、関心を向ければ、社会は必ず変わっていくはずだ。

テレビや新聞といったメディアは、その時に一番人々が注目するニュースしか報道しない。つまり、一過性があるのだ。私達はメディアに情報を与えてもらっているのである。

日本は災害が本当に多い国だ。今年も、平成30年7月豪雨、台風12号といった災害が相次いでいる。だからこそ、私達は被災地にもっと目を向けていこう。一過性のメディアがもたらす情報だけで、被災地を分かった気にならないで。私達の行動で被災地は変わると、私は信じている。被災地の方々が少しでも前を向いて歩んでいけるようになることを、私は願わずにはいられない。